

黒鬼の過去

えりん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

このお話は現在投稿中作品の「黒鬼の血」の関連作品となります。

「黒鬼の血」のすこし前に起こった感じになります。

あらすじは

ある事件に関係がある天人を捕まえる時に

沖田をかばい土方が……………そして

色々あつて土方の過去へとタイムスリップ！

とゆう感じですよ。万事屋メンバーも出ます。

目次

ある事件	1
悪夢と現実	6

土方「てめえやっぱりわかってねえだろおオオオ!!!」

沖田「チツ逃げるか…」

土方「さてコラ総悟おとおお!!」

今日はそのまま土方コノヤローに追いかけられた
1日だった。

いつもの様に俺がふざけて殺そうとして

あいつが起こって叱って

山崎がヘマやっつて怒られて

近藤さんが馬鹿やっつててゆう

そんな1日がまた続くと思っていた。

だがそんなおかしな日常は

俺のすこしのヘマで

全てが狂ってしまった。

あの時俺がしっかりしてれば

あんたは……

沖田「ふうやっつと逃げきったな」

「あれ？沖田くん？」

沖田「その声は……旦那？」

銀時「久しぶりだねえ、何？またサボリ？」

沖田「ちようど今クソマヨラーから

逃げてきたところでさあ」

銀時「大変だね、沖田くんも」

沖田「ええ、そりやあもう」

沖田「ああそーいや旦那に

わたしたいもんが」

銀時「え？何なに？」

沖田「これでさあ」

そこにあつたのは

パフエ無料券と書いた紙だった

銀時「え!? いいの!? これ!」

沖田「どうぞどうぞ」

銀時「じゃあ遠慮なく!」

銀時はこの時、沖田の悪だくみか

何かじゃないだろうかと考えたが

パフエの誘惑に負けてしまったのは

言うまでもない

沖田「じゃあ俺は行くんで」

土方「見つけたぞ! 総悟!!」

沖田「げっ!」

土方「てっコラ! 逃げんな、待ちやがれ!」

二人はすぐに銀時の目の前から消えた

銀時「…本当大変だねえ、さて

俺はパフエたべよ♪」

なんてるんるん気分だったのである。

沖田「逃げきったか?…」

沖田は後ろを振り向き

角へと隠れ、静かに様子を見る。

土方「くそッ! どこ行きやがった…」

沖田「(よし、もう少しこのままでいるか)」

土方「…:…おい、出てきたらどうだ」

沖田「!?(まさか、バレたのか!?)」

目を見開き静かに驚くと

反対方面の角から声が聞こえてくる。

? 「流石、真選組鬼の副長

あなどれないな」

土方「てめえ…:わざと俺に気付かせたろ」

? 「お見事、やはり素晴らしいですね。」

土方「…何もんだお前」

? 「私は何ものかなんて

今はどうでもいいじゃないですか

私は貴方に話があるんですよ」

土方「…んだと…!?!」

沖田「(こりゃあ 裏に回って奴の背後を…)」

ガタツ

沖田「しまっ…!」

? 「ただし、鼠を始末したからですが」

謎の男は目に見えないくらいの速さで

俺の元へとついた

? 「死になさい」

ああ、……死んだな

そう思った瞬間に

目の前から赤が見えた

だが痛みはない

おかしいと思いい目を開けると

沖田「…あ……なん……で」

目の前には土方さんがいた

俺をかばって斬られた

土方さんが俺を…

頭にぐるぐるとその言葉が回る。

? 「やはりそう来ましたか…」

すると男は服から注射器を取り出し
それを土方さんの首元へと運んだ

沖田「て…めえ!!」

? 「鼠は黙ってなさい」

沖田「ぐっ…!!」

意識が遠のいて行く

ひ……じ……か……た……さん

途切れ行く意識の中で

目の前で倒れた土方さんが

注射器を刺されるのが見えた。

それが日常が遠のいて行く瞬間だった

悪夢と現実

ご……

そ…………お…………!

ん……うるさいでさあ土方さん

もうちよつと寝かしてくださいよ……

そう…………ご…………!!

た……ちよ!

るせーな……

土方さん

近藤「総悟!!」

沖田「ん……う……」

近藤「……!」

沖田「あ……れ?……近藤さん?」

近藤「総悟!よかった……」

沖田「なんで……こんな所に……」

近藤「総悟実はトシが」

沖田「土方さん?……………あつ」

沖田「近藤さん!土方さんは!」

土方さんは大丈夫なんですかい!」

近藤「今のうちは大丈夫だ

今は病室にいる」

沖田「よかった……だが……え?」

近藤 「何度呼び掛けても全然起きないんだ」

沖田 「…起きない?!?!」

その時俺はあることを思い出した。

あの時の注射の意味を

沖田 「ま…さか…!」

近藤 「どうかしたのか?!」

沖田 「近藤さん! まずいことに!」

ぐるんと回るような気分

軽く吐き気が回る。

総悟は気絶させられている。

よくわからない気持ちと眠気が

波のように押し上げてくる。

土方 「…う…あ…」

? 「フフ、流石はあの人の血を継いでいるだけある」

熱い気持ち悪い

目の前がチカチカとする

? 「もつとも早く眠りにつけばいい物を

耐えれば耐えるほど苦しみはますます?」

頭が真っ白になる程に色々な

事を思い出して行く

ミツバが死んだ時

伊藤が死んだ時

あの人が死んだ時

山崎「局長！出ました！夢苦草が」

近藤「なんだって!？」

夢苦草（ゆめくそう）、最近話題になっている
夢幻事件の正体である。

沖田「やっぱりじゃあ、あいつは…」

近藤「なんとか出来なのか!？」

山崎「残念ながら、助かる方法はないらしいです…

自力で夢を捻じ曲げない限り」

近藤「じゃあそうすれば!」

山崎「たとえ起きたとしても…

副長が今までの副長のままで居られるかどうか…」

沖田「どうゆう事でえ…」

山崎「実際この薬を投与されて目覚めた人も

いるんですけど…全員精神崩壊を起こすほどで…」

「!!」

山崎「だからきつと副長も…!!」

近藤「馬鹿野郎！トシがこんな薬に負けるわけないだろ!」

山崎「そんな事分かってますよ！

…でも…でも…」

苦しそうな顔で言う山崎

近藤さんもきつと俺も顔色が悪い

山崎「でもそれ以外で

助かる方法が一つだけあるそうです」

近藤「本当か!？」

山崎「はい」

それは